HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光を基軸とした地域のソーシャル・イノベーション
Author(s)	池ノ上, 真一
Relation	北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 「観光創造学を考える」研究会録. 2013年11月23日, 24日. 北海道大学遠友学舎.
Citation	「観光創造学を考える」研究会録 / 北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 75-81
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56566
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	conference paper
File Information	06_1ikenoue.pdf, 発表

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

◆研究発表６

観光を基軸とした地域のソーシャル・イノベーション

北海道大学観光学高等研究センター
池ノ上真一

昨日まで竹富島の種子取祭に，9 日間の日程すべてに参加していました。竹富島のお酒の種類は，みしゃく，ぐし，しまー，オリオンビールの 4 種に増え，それらすべてを堪能してきた次第です。本日は，その竹富島の空気とアルコールとを背景にお話しさせていただきます（笑)。

研究領域や研究プロジェクト ～交流を基軸にした地域の再評価

最初に，現在取り組んでいる研究領域や研究プロジェクトに関してまとめます。私は，観光地域づくり・地域計画をテーマに，地域が抱えている矛盾を明確化しながら，地域課題を解決するための地域づくりを研究しています。具体的には，例えば今回竹富島の種子取祭に参加しましたが，現在の竹富島の人口は 350 人です。種子取祭を支えるためには 500 人が必要だと試算されていますが，足りない 150 人分は何十年も前から郷友会という組織が補っています。竹富島出身で石垣島，沖縄本島，東京に住んでいる人がそれぞれ郷友会に所属し，祭りの時期に島に戻ってきます。特に，石垣郷友会は「長男」とも呼ばれており，奉納芸能の演目まで担っています。島出身ではあるが島に帰ってこられない人は寄付で参加するなど，なんらかの形で参加できる仕組みを作りながら祭りの運営をしています。それに加え，わが観光創造専攻の学生にも現地集合現地解散という条件で参加してもらいましたが，同様な外部からの応援団がいます。常連客をはじめ，今年は獨協大や東京農大などの学生が祭りの手伝いをしていました。それ以外にも去年開業した「星のや」も総支配人を筆頭にお手伝いとして参加しています。そのように竹富島では，地域を 1 つの軸にして人々が集まり，地域が持つ仕組みであり，地域が大切にする祭りという場を維持する方法が何十年も続いています。この島を見ながら，そういった外部との交流を柔軟に捉えた地域コミュニティづくりをテーマにした研究をしています。

前職の日本ナショナルトラストにいたとき，そういった話を様々な人たちと重ねて，「第 2 のふるさとづくり」の仕組みづくりができないかと構想していました。今後のナショナルトラストのひとつの活動テーマとして立ち上げる取り組みを行っていたのですが，その延長線上で取り組んでいるのが，これから説明するいくつかの仕組みづくりです。それが資料の(2)の②，気仙沼市内湾地区と釜石市での取り組みです。どちらも東北の三陸沿岸地域であり，カツオ漁やサンマ漁をとおした様々なつながりの中で形成されてきた地域です。釜石であれば，鉄鉱石・砂鉄を原料として，近代では大きく製鉄所を中心に発展しました。それらを産業の遺産をなんらかの資源として生きていくのですが，単なる遺跡・遺産としては生きていけない。これまで形成した生活スタイルはすでに破たんしているのは確かです。例えば，九州・山口を中心とする世界遺産の候補に挙げられる産業革命遺産のリストの中に，実は飛び地で釜石も入っています。しかし忘れられがちであり，リストに入っている釜石の産業遺産も地味なものです。世界遺産も 1 つのツールとして使えるかもしれませんが，従来の山や海と人との関わりを見直し，再評価をとおした新しい仕組みづくりを考えています。特に，第 2 のふるさとづくりをテーマとし，地域がこれまでにつくりあげてきたライフサイクルを根拠とし，これからつくり上げていくライフサイクルを軸として，外部の人たちといろいろな

交流機会を創出して，その中で新たな地域の仕組みづくりをしていきたいと考えています。特に，先ほど話が出た長野や山間地のふるさとという話とは逆で，交流によって成り立ってきた地域をテーマとして，その中でツーリズムの可能性を探っていきたいと思います。それが(3)の「海の道」の研究です。陸地から見れば海との境界地域であり，島であり半島であり，竹富島や礼文島もその例であり，国としての境界地域もあります。そのようなところには，多様な地域や文化を背景としてもつ人々が，いろいろな形で交流することで，地域として新たな融合が生まれ，独自の文化を創造しています。その中で，気仙沼市内湾地区をはじめ，留萌，小樽，釜石などのみなとまちを事例地として研究を進めています。先ほどの島をはじめ，それらを含めて大きく捉えた「海の道」の可能性に期待した研究を行っています。それは，陸地とは違う移動時間や移動のための労力があり，しかし一方で海峡や海流は地域を繋げたり，文化圏を作る 1 つの大きな要素としても捉えることができます。特に現在は，津軽海峡文化圏や対馬海流圏などに取り組んでいます。

例えば対馬海流圏では，先日，五島列島に行ってきたところです。その中で，いろいろなつながりを見ることができました。また，礼文島では島の北端の船泊地区に縄文遺跡があります。最近，出土品が文化庁に重要文化財に指定されました。その出土品から，縄文時代にアクセサリー工房があったと推測されています。アクセサリーに使われていた素材は，南の島でしか採れないイモガイをはじめ，島にはいないイノシシ，おそらく新潟から来たと思われます。また，それらを加工する技術をどのように得ていたかというと，それはオホーツク人からの文化ではないかと推測されています。海獣を捕まえるため，いろいろな針や槍などの固いものを加工する高い技術がオホーツク人からもたらされました。また，南から来た縄文人が使う素材と技術とが相まって，新たなアクセサリーの加工文化が生まれ，それを文化庁が認めて文化財としての評価がなされました。礼文島では，地政学・地理学的な価値を再評価し，これからの生活スタイルや地域づくりをどのようにしていくかを大きなテーマであると考え，研究に取り組んでいます。

また一昨年前からは，UNWTO からの依頼で海のシルクロードについての調査研究に取り組んでいます。本来，シルクは海を渡っておらず，陸地である草原や砂漠，オアシスを通っていたのはご存じのとおりです。しかし，海域に目を移すと，ユーラシア大陸の東と西をつないでいた道があったということを前提として，これからの観光を切り口とした地域づくりという視点でどのような可能性があるのかという調査をしています。

さらに，(4) にもありますとおり，観光庁や文科省と連携し，それに必要な人材育成とはどのようなものかという研究も行っています。

観光創造学への貢献
～ソーシャル・イノベーションへの挑戦

以上の取り組みをとおし，観光創造学に関する考えや，私の貢献の可能性についてお話ししたいと思います。1 つは，地域に発生している矛盾を解消することです。特にそのために，実現段階についてどうすればよいか，学術的な立場からどのような貢献ができるのかを考えています。「海の道」に含まれる地域は，外的，内的なものをすべて含めて，様々な環境の変化をとおして，地域にいろいろな矛盾が発生してきたと考えられます。現在は，それがより複雑化し，さらにグローバリゼーションへの対応も求められている中で，より学術的な貢献の必要性が強くなっていると感じています。しかし，これまでの地域社会は，そういった地域矛盾に対して，いろいろな取り組みの中で対応してきたはずです。現在における課題解決の取り組みの方法を導き出すため，特に観光に着目することが意味あることとして捉えています。そこで (2) ①では，地域が矛盾を解消するため，地域の仕組みを変え，地域の社会的な仕組みを変える

という形で行われてきたソーシャル・イノベーションをいかにおこすか，いかに遂行していくかに着目しています。例えば，イノベーションの構成要素についての研究に取り組んでいます。これまでの地域を考えたときに，気仙沼や釜石のようにカツオが来たから人々がやってきました。山で金や鉄が取れるから人がやってきて，交流が生まれました。つまり，仕事という視点で説明がされてきています。現在のみなとまちを見ていると，いろいろなつながりの中で見られる，例えば人々の祭りといった遊びに関する生活文化も重要と考えています。その２つの観点から地域の生活への評価ということに取り組んでいきたいと思います。なぜならば，地域で人々がいかに生き続けられるか，地域そのものがいかに存続できるかについて考える営みであるからです。

改めてまとめます。前提として，観光を基軸とした地域課題の解決を目的とした実現のためのプロセスが，私が対象とする研究のもっとも重要な観点です。特に地域生活をいかに持続させるかが重要です。観光の交流を創出することにより，地域力をいかに再生するか，あるいは発展させるかが大きなテーマとなります。観光という現象の定義として，人の交流・モノの交換であると捉えていますが，その中で，発生した仕事あるいは経済の仕組みといったような交易の機会をも含め観光を捉えていくこととしています。目標としては，観光地域づくりのモデル化に取り組んでいます。またその前提として，必要な地域の力とは何なのか，「地域資本」の考え方を持ち出しながら取り組んでいます。地域において，いかにその資源を評価できるか，さらに発展，再生させるにはどのような方法論があるかについて開発していきたいと考えています。

特に私は，すべての地域が対象ではなく，まずは「海の道」に関連して形成した地域を対象とし，観光の可能性について研究していく方針です。そのために，今後議論する枠組みとして，次の４つのこと（配付資料（3）参照）を考えています。

１つ目は，地域力や地域資本などをとおして，地域をいかに捉えるかについてです。その地域資本の構成としては，文化，社会，経済といった観点から，構成要素とその構造について捉えるべきだと思っています。その中で，現在地域で発生している矛盾の解決のために，いかに地域力を捉えるかを考える必要があると考えています。そして，観光をいかに地域のために使うか。直接的効果はもちろんのこと，地域の生活のためのインフラをいかに維持するか，あるいは発展させるのか，生産活動をはじめ，生活のための商売，文化を維持，発展させるのかといった間接的効果についても検証していくことが重要と考えています。

特に「海の道」というものに着目することが，地域力の解明方法の開発の近道と考えています。また，地域の特性に合わせた体制とはいかなることか，人材，役割分担について考えていきたいと思います。また，地域の中だけではなかなか捉えきれなかったり，獲得することのできない新しい考え・方法をどのように獲得するかも重要と考えています。それを地域のために融合させ，地域のものにする方法とはどのようなものなのか。例えば竹富島でいうと，なぜあの島に人が移り住んできたかということはほとんどわかっていない。カツオや海産物を追いかけてきたのか，あるいは平家の落武者伝説が由来など諸説あります。しかし，琉球王国，アメリカ，日本といったいろいろな主体がやってきて，その中でもたらされた新しい考え方や方法を，島として獲得し，取り込んできた。それを現在ではどのように実現できるのか。この中では外の交流と農業とをやってきた中でつくりあげてきた，融合のための独特の仕組みがあったと思います。それを現在では，観光という現象を中心としながら，むしろ農業を捨てた地域として，どのように融合させていくのかが大きなテーマです。そういった中で「星のや」は，地域の資源の活用者として期待はできます。ただし，新たに資源を生み出すことはできない。そこで役割分担が求められます。島と「星のや」であったり，移住

してくる人たちや，移住まではいかないが郷友会などと連携できる仕組みづくりができると良いと思います。それが私の考える「第 2 のふるさとづくり」の根底となる考え方です。③にあげているゲスト側にとって地域はどういった役割なのかというところも考えるべきと思います。その中で地域の社会的な構造をどのようにつくるかが課題です。そして，それを進めるための観光戦略も必要です。

時間も迫ってまいりましたので，その他につきましては資料をお読みいただければと思います。以上で終わります，ありがとうございました。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：真板

大きなテーマが 3 つあると思います。1 つは，種子取祭が未来に向かって島おこしの軸とするならばどうやって持続化していくかストーリーではなく仕掛けの面です。なぜ何百年も種子取祭が続いてきたかというと，その仕組みがどのように形成継承されてきたがポイントだと思います。似た話で京都の祇園祭があり，それは商人が作った祭りで，その原型の嵯峨の祭りは 500 年近く今日まで続いており，続けるために嵯峨野の人々は排他性と人を受け入れるという両面を実施するために教育委員会と嵯峨学区，町内会と商店街，神社と結びついていると思われる運営委員会的な仕組みを，維持しながら観光客を応援団として受け入れる仕組みを作っています。もう 1 つは，文化の交流に関して，竹富島を含め，ストーリーがないとだめで，人は飽きが来るので，どういうストーリーのなかで位置づけて内と外の人を繋げていくことが重要で，ロマンやストーリー性を共有していくべきだといえます。3 つ目は，池ノ上先生が考えている仕組みストーリー地域活性化は誰が誰のためにこの研究を進めようとしているのか教えて頂きたいと思います。

回答：池ノ上

ありがとうございます。取り組みは，主体は，誰が，というところについては，地域に住んでいる人々，何かをするためにはその人たちが集まってできるパブリックがあり，そこが行うでしょうが，そのあたりは悩んでいる点でもあります。竹富の NPO で働いた経験がありますが, 文化や生活をつくっている人であり，地域で役割を担っている人が，地域住民の総体的な考え方です。単純にパブリックを固定的に考えることは難しい。地域に人が住むのは一人では難しく，ある程度文化的な生活を営むには，地域社会の仕組みが必要であると思います。地域が形成され，地域に住みたいと思っている人を原点と考えながらその中で出来上がっていく仕組み，地域というコスモス，いかにあるべきか考えていきたいと思います。

コメンテーター1：真板

地域の人は地域の仕組みを変えたいと思っているんでしょうか。西表では，東北大震災のゴミを受け入れなかった。西表は関係ない自分たちが良ければいいという理由で自分たちの文化を守っていけばいいからというものでした。徹底した地域主義であるといえます。かたくなに今持ってきている地域の仕組みを変えたいのでしょうか。星のやの場合は，竹富の人は受け入れているのではなくしたたかに思っていると捉えられます。この研究で地域のソーシャル・イノベーションをどの立場で変えられるのかが課題ではないでしょうか。

コメンテーター2：石川

とても面白い研究だと思います。観光創造の分野で海や港町や水産に関連した研究をしている人はまだ少ない。北大の観光創造として地域を考えるにあたり，その切り口から取り組むことは希少性，先行性もあり自分自身も取り組んでいることもあり応援したいと思います。観光のためではなく，四方を海に囲まれている北海道，日本がなぜ生きているのか。港町であれば水産業が基礎にあ

りますが，地域産業が生業（なりわい）として成り立つにはというテーマを観光創造の立場で研究することで地域再生の糸口が見えるように思います。さらに地域再生にあたり地域自身が儲かるためにどのようなことをすれば良いのか，一緒に考えていく立場になれば北大の観光創造という存在が認識され重要視されるでしょう。北大には水産学部もあり連携をとることも考えられます。道東の話ですが，旅行会社の要請で漁獲資源保護のため自主規制をしている休業船を活用し沿岸からエトピリカ（海鳥）の観察観光を始めたら海外からも多くの観光客が増え続け，自分らの地域資源の再発見をした事例もありますので，ご参考になればと思います。

回答：池ノ上

ありがとうございます。真板先生に対して，私は地域計画や地域研究を通した計画案みたいなことをしていると地域の再構築や活性化を求めているのかということですが，その点は私も感じている課題です。その中で海の道に着目をしており，西表のケースの地域主義，例えば，日本とか中国のケースで，日本を日本的中華世界というか国家主義かもしれないがそのようなものに対して，地域だけ，島だけで生きていくとか，西表でもいろいろな性格があります。また同じ西表島でも，西部地区と東部地区，あるいは北部地区もまったく違う文化があります。そのような地域が，それぞれ自立しながらそこからの変化をしたたかに上手に利用して，生き続けていく世界も面白いと感じています。海のシルクロードについても，東南アジアの海域世界に着目しながら，そこも国家というのは近代とか現代に無理やり名乗っているだけで，それぞれ違う文化や民族，これまでの文脈も地域が成り立っています。さらに地域が違う中で，海域世界の中で交易交流を通じて発展し形成されてきた。その中で，石川さんのおっしゃる観光にこだわらないという点に関してですが，現在において地域を再生，イノベーションという形で再構築する手段としては，とくに観光という現象がツールとして使えるのではないかと捉えています。北海道のアイヌの世界を知り，礼文島に調査に行って改めて感じました。国家や大きな民族ではなく，小さな地域の集まりや多様性の中で横につながって成り立ってきた世界が，今後の地域づくりの研究をすすめるために注目していきたいと思います。その延長線上にみなとまちの研究を位置づけています。地域同士が横のつながりの中でネットワークをもち，どこが一番というよりは，それぞれの多様性の中で成り立ってきたフラットな地域のつながりに期待と魅力を感じています。

コメント：西山

さきほど私が提示したダイアグラムですが，上の部分は現象を分析するもので下の部分はマネジメントが関わっていくものでしたが，計画系の人間は，誰が誰のためにやるのかということを常に意識しなければならなりません。自分は，現象を分析するのかマネジメントを研究するのか，計画者として私たちは，それをはっきりさせて研究に臨まなければいけません。観光創造学には，この上部と下部の両方が必要なのではないか。重心をどこに置くかはありますが，そこから乗り出していくべきです。そのような行き来が観光創造というものの可能性を広げるものと考えます。